

赤神山の中腹、岩肌にせり出すように組まれた太郎坊宮の「舞台」。京都・清水寺と同じ「懸造り」の工法で、明治十三年（一八八〇）に建てられたと伝わる。以来、百四十六年。蒲生野を一望するこの舞台が今、大修復の時を迎えようとしている。

「まだ持つかもしれない。けど、傷んでから慌てるんやのうて、元氣なうちに手を入れる。それが、この山を預かる者の務めやと思うんです」。

奥田宮司は、決断の理由をそう語る。この山に仕えて四十年。老朽化は分かっていた。だが山肌に建つゆえ、工事の見積は膨らみ、簡単には踏み切れない。それでも「次の代に胸を張って渡すために、いま、わしらがやらなあかん。そう腹を決めました」。

修復が必要な建物は、指定文化財を含め二十件ほどにのぼるという。その第一歩が、人々が立ち、蒲生野の風景と向き合うこの「舞台」だった。

建て替えるではない。傷んだ木を差し替え、昭和二十三年にコンクリート敷きとなった床を、かつての木の床へ戻す修復だ。木の床は三十年もすれば張り替えが要る。でも、それでいい、と宮司は言う。「その時に『やります』『よっしゃ、やりましょ』と言い合える地

第一回

「百四十六年目の決断」

阿賀神社（太郎坊宮）登録有形文化財修復委員会

域であり続けてほしい。この普請は、次の世代への宿題でもあるんです。修復を一度きりで終わらせない。その先に、宮司は未来を見ている。

太郎坊宮の建物は、いつの時代も人の力で守られてきた。江戸の頃には郷中の人々が護持し、信長の兵火からの復興は各地の信徒の手で成った。宮司の胸には、御成敗式目の一節「神は人の敬いによって威を増す」がある。守る人あってこそ、祈りの場。「建物を残すとは、人の祈りの営みを残すこと」なのだ。

連載の名は「天狗たちの大普請」。普請とは、ただの工事ではない。「皆で力を合わせる」とが大切。聖徳太子の『和を以て貴しと為す』を守りたい」と宮司は願う。天狗の棲む山を仰ぎ、守り継いできたのは、この地に生きる人々。あなたも、その末裔のひとりだ。百四十六年ぶりの大普請が、いま始まる。一年をかけて、関わる人たちの「言葉と姿」をお届けしていく。

天狗たちの大普請



奥田宮司